

幼小連携における教師の相互理解を促す研修プログラムの開発

谷口夢歩*・椋木香子**

Development of a Training Program to Promote Mutual Understanding among Teachers in Collaboration between Kindergarten and Elementary School

Yuhō TANIGUCHI and Kyoko MUKUGI

1. はじめに

近年、幼小連携・接続¹⁾の重要性が指摘されるようになった。「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(2010)(以下、「報告」と略記)では、幼小接続の重要性について、「幼児期の教育(幼稚園、保育所、認定こども園における教育。以下同じ。)と児童期の教育(小学校における教育。以下同じ。)は、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることは極めて重要である。」と述べられている。2017年(平成29年)3月に告示された『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」²⁾が明記され、『小学校学習指導要領(平成29年告示)』では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」と明記されている。

これらを受けて、幼児と児童の交流活動や幼小の教職員の意見交換といった各学校・施設における幼小連携の取り組みは進んできているが、幼稚園教諭・保育士・保育教諭(以下、三者を含めて「保育者」と表記)と小学校教諭の相互理解や教育観等のすり合わせが十分でないという問題が指摘されている。平成21年に文部科学省が実施した都道府県・市町村教育委員会に対する調査によると、ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識しているにもかかわらず、その取組が十分でない理由として、「接続関係を具体的にすることが難しい」(52%)に続いて、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」(34%)ことが挙げられている(「報告」)。また、有嶋(2018)は、幼小連携・接続の現状として、小学校に幼稚園児を招待し交流をするという活動や、子どもの引き継ぎの場を設けている学校園は多いが、互いの

*宮崎市立青島小学校

**宮崎大学大学院教育学研究科

教育内容についての話し合いや研修会を行っている学校園は少ないということを指摘している。

さらに、「報告」の中で、「幼児期の教育と児童期の教育は、それぞれ発達の段階を踏まえて教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意することが必要である」と述べられているように、幼稚園や保育所等では、子どもの発達の段階に合わせ、遊びを通した学びをさせることが重要であるが、幼小接続が小学校入学のための準備教育になっているような状況もある。幼児期から児童期にかけて、子どもの学びの連続性を保証するよう連携していくためには、まず幼小それぞれの教育内容を理解する研修会の設定が必要であるが、幼小の教育の違いについて十分理解・意識するためには、教育内容だけでなく、教育観や子どもをみる視点の検討や共有を含めた研修内容にする必要があるのではないかと考えた。

先行研究においては、子どもについての情報交換や相互の授業参観を行ったり、それぞれの教育課程について研修会等を行ったりして、教育内容を相互理解する研究は多いが、教育観や子どもをみる視点にまで踏み込んで相互理解を図る研究・実践はほとんどない。その中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、幼小の教員の相互理解プログラムを開発し、参加者の感想を分析して研修への活用可能性を検討した小松（2020）の研究がある。本研究では小松の研究を参考にし、教師の子どもをみる視点や教育観の相互理解を深める研修プログラムを開発、実践し、その効果について検討することを目的とする³⁾。

2. 研修プログラムの開発

(1) 研修プログラム用の映像資料の作成

研修プログラムの目的は、幼稚園教諭と小学校教諭が幼児期の子どもの様子を映像で見て話し合うことを通し、それぞれの教育観や子どもをみる視点について相互理解を図ることである。そのためにも、研修プログラム用の映像資料の作成を行なった。2021年10月25日に宮崎大学教育学部附属幼稚園にて、研修用のビデオを撮影した。撮影したビデオの中から、研修で扱いたい場面を選択して編集し、映像資料を作成した。選択した場面は、①子どもが2人で協力してダンボールの車を工作している場面（以下、「屋内での車の工作」）（5分3秒）、②3人で砂を使ってチョコレートを作っている場面（以下、「砂のチョコレートづくり」）（5分18秒）、③たたかいごっこをしていて友達にぶつかってしまった場面（以下、「たたかいごっこからのトラブル」）（5分35秒）である。

3つの場面を選択した理由は、①2人以上で遊んでいること、②室内、屋外のどちらかに偏らないようにすること、③遊びとトラブルの場面を入れること、④小学校と幼稚園で指導の仕方や子どもの遊び等が異なることが分かる場面であること、の4点である。

(2) 研修プログラムの内容と特徴

研修プログラムでは、作成した映像資料の3つの場面を幼稚園教諭と小学校教諭で視聴し、話し合うこととした。それぞれの場面ごとに、ビデオを視聴した後、まず感想を共有し、次に小学校教諭から幼稚園教諭へ質問をする。このプログラムを通して期待される効果は主に二つある。一つは、幼稚園での子どもの姿や幼稚園教諭の教育観、子どもをみる視点、指導観等を小学校教諭が学ぶことができるという点である。もう一つは、小学校教諭が抱いた疑問への回答やその後の話し合いから、幼稚園教諭が小学校教諭の教育観、子どもをみる視点、指導観等

との違いを理解できる点である。

また、話し合いでは、まず小学校教諭から感想を言い、その後、幼稚園教諭が感想を言い、互いの感想を共有した。そうすることで、幼稚園教諭の情報に囚われることなく、小学校教諭がビデオを見た率直な感想を述べられるようにした。感想の共有後は、小学校教諭から幼稚園教諭に質問をし、幼稚園教諭がその質問に答えた。小学校教諭から質問を出させた意図としては、自分の視点と異なる際に疑問を持つと考えられるため、小学校教諭から質問させることで、教育観や子どもをみる視点、指導観について焦点化させることができると考えたからである。

表1 研修プログラムの内容

場面	内容	時間
【場面1】 「屋内での車の工作」 (5分3秒)	① ビデオ視聴 ② 感想の共有(1.小学校教諭 2.幼稚園教諭) ③ 質疑応答(小学校教諭→幼稚園教諭)	15分
【場面2】 「砂のチョコレートづくり」 (5分18秒)	① ビデオ視聴 ② 感想の共有(1.小学校教諭 2.幼稚園教諭) ③ 質疑応答(小学校教諭→幼稚園教諭)	15分
【場面3】 「たたかいごっこからのトラブル」 (5分35秒)	① ビデオ視聴 ② 感想の共有(1.小学校教諭 2.幼稚園教諭) ③ 質疑応答(小学校教諭→幼稚園教諭)	15分

本研修プログラムの特徴として、以下の3点が挙げられる。

第一に、実際の子どもの姿を視聴し、話し合うという点である。具体的に実際の子どもの様子をビデオで視聴し、話し合うことで、その子どもをどのように見たのかを、幼小の教諭同士で共有、検討することができる。また、話し合いを通し、教育観や指導観についても違いを感じることができる。と考える。

第二に、幼小の違いについて把握した上で、子どもの姿のビデオを撮影した点である。本研究では、筆者らが先行研究やインタビューをもとに⁴⁾、幼小の教育の違いを把握した上で、子どもの姿を撮影した。そのため、小学校では見られない場面を選んで撮影したり編集したりすることができた。幼小の教育の違いを認識しやすいプログラム用ビデオを視聴することで、幼小での子どもをみる視点や教育観の違いを把握したり、相互理解したりすることが可能となると考える。

第三に、どちらかの教諭だけを対象に研修会を実施するのではなく、幼稚園教諭と小学校教諭が参加し、話し合わせた点である。小学校または幼稚園のどちらかの教諭だけでは、違いを明らかにしたり、違いを感じたりすることは難しい。両者の教諭を話し合わせることで、子どもをみる視点や教育観の違いに気づき、相互理解を促すことができると考える。

(3) 研修プログラムの映像資料の概要

1) 「屋内での車の工作」(場面1)

①映像資料の概要

この場面では、室内で年長児の二人が協力し、様々な材料を使いながら車を工作している。

車体はダンボールを使い、ハンドルは丸い形の惣菜容器、タイヤは透明の丸い容器など、イメージにあった材料を選びながら車を作っていた。また、ハサミやカッター付きのセロハンテープなどを自由に使っていた。

材料がある場所が分からなかったら教えてあげたり、年下の子どもが材料を欲しがっていたら渡したりする優しい姿も見られた。しかし、同年齢の子どもが興味を示してきたら、「これ、私が持って帰るんだからね」と強く主張する姿も見られた。

写真1 ダンボールの車を工作している場面1



写真2 ダンボールの車を工作している場面2



② この場面を選択したねらい

この場面を選択したねらいには二つある。

一つは、小学校の図画工作科や生活科との違いに気づける場面だからである。小学校の図画工作科や生活科では、材料を限定していたり、作るものが決まっていたりする。しかし、幼稚園では、子どもがイメージにあった材料を自分で選択したり、材料からイメージを膨らませたりして自由に遊ぶ。同じような工作の場面でも、子どもの活動の違いや指導の視点が異なる。

もう一つは、子ども同士の関わりが分かる場面だからである。小学校では、2人以上で作品を作る場合には、決められたグループの中で協力して作ることが求められるが、幼稚園では、自分が作りたいものを一緒に作りたい友達と作ることができる。そのため、時には、遊びの中心になっている子どもの主導権に従いながら作る状況になることもある。そのような子どもの遊びの様子から、子ども達の人間関係を観察することができる。

2) 「砂のチョコレートづくり」(場面2)

①映像資料の概要

この場面では、3人の年中児が、屋外で砂や水などを使ってチョコレートを作る「ごっこ遊び」をしている。鍋やおたまなどの道具、チョコレートに似ている色の砂や水を準備し、砂に水を加えながら砂のチョコレートを作っていた。その遊びの中で、一人の女兒が穴あきおたまを使っており、なかなか水がすくえていなかった。それを見た女兒が他のおたまを取りに行き、その子に渡してあげるといった助け合いの姿も見られた。

3名の女兒は個性も異なる。1人目の女兒はリーダー的存在で、他の子たちに指示をしながら遊びを進めていた。また、2人目の女兒は、リーダーの指示を聞きながらも自分なりの方法で進めていた。3人目の女兒は、どのようにしたら良いのか分からず、他の子どもがすることを真似ていた。また、リーダーの子どもに注意される事もあった。

写真3 3人で砂を集めている場面



写真4 砂を使ってチョコレートを作っている場面



② この場面を選択したねらい

この場面を選択したねらいには二つある。

一つは、遊びの中で子どもが学ぶ姿に気づける場面であるからである。子どもたちは、なぜ水がすくえないのか考え、道具を変更するという選択をしていたり、ある子どもは、他の子どもを真似たりしている。小学校で子どもがこのようなことをしていたら、ただ遊んでいるだけだと思われがちだが、幼稚園では、遊びを通して様々なことを経験し、自然に学んでいると捉える。

もう一つは、この期の子どもの人間関係や子ども同士の関わりが分かる場面だからである。さらに、年中児であっても、それぞれ個性があり、個別の子ども理解の重要性にも気づくことができる場面である。

3) 「たたかいごっこからのトラブル」(場面3)

①映像資料の概要

この場面は、たたかいごっこをしていた年長児の子どもが、近くで遊んでいた友達にぶつかり、ぶつかられた子どもが泣いてしまったというトラブルの場面である。ぶつかられた子どもが泣いてからは、たたかいごっこをしていた2人の幼児とぶつかられた1人の幼児、それを見ていた1人の幼児で話し合いをしていた。初めは、たたかいごっこをしていた2人が罪をなすり付け合っていたが、次第に2人で互いに謝り出した。その後、ぶつかられた子どもにも謝罪をするが、なかなか許してもらえずにいた。ぶつかられた子どもの表情が暗いため、たたかいごっこをしていた2人が彼を笑わせようとし、結果的に泣いていた子どもも笑顔を取り戻していった。また、トラブルを見ていた女兒は仲裁役をしていた。

幼稚園教諭は、子どもがたたかいごっこをしても止める様子はなく、1人の子どもが泣いてからは、子どもの様子を遠くから見守ったり、関わった子どもを話し合いに行かせたり、様子を見にくる子どもに向こうで遊ぶよう声かけをしたりしていた。

写真5 たたかいごっこをしている場面

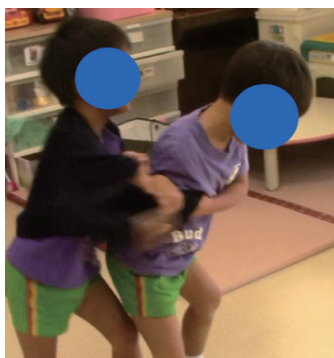


写真7 子どもたちで話し合っている場面



② この場面を選択したねらい

この場面を選択したねらいには三つある。

一つ目は、トラブルがどのように起こっているのか、また、それを子ども達だけでどのように解決していくのかが分かる場面だからである。幼稚園教諭は子どもたちの様子を遠くから見守っており、子どもたちが自分たちで話し合いながらトラブルを解決していった。つまり、幼稚園教諭は子どもたちだけで解決できるような場作りをしていたということである。

二つ目は、たたかいごっこで学ぶことを考えられる場面だからである。小学校であれば、子どもがたたかいごっこをしていたら、すぐにやめさせられると思われるが、子どもはたたかいごっこを経験することで、やりすぎると痛いということや怪我してしまうということを学んでいく。また、やりすぎると相手も自分も嫌な思いや悲しい思いをするということも学んでいく。

三つ目は、小学校教諭と幼稚園教諭での対応の違いが分かりやすい場面だからである。上述のように、小学校教諭であればすぐに介入し、指導をする場面だと考えられるが、幼稚園教諭は見守りつつも子どもたちだけで解決させた。これにより、子どもたちにトラブルを解決する力をつけることもできる。いつでも教師が介入し、指導することが良いとは限らないということはこの場面から気づくことができる。

3. 研修プログラムの実際と効果の検証

(1) 研修会の目的と内容

開発した研修プログラムの有効性を検証するために、このプログラムによる研修会を実施し、参加した先生方に事前アンケートと事後インタビューを行なった。研修会は、2021年12月6日に宮崎大学教育学部附属幼稚園で行った。調査に協力してくださったのは、宮崎大学教育学部附属小学校の2名の教諭、及び宮崎大学教育学部附属幼稚園の2名の教諭の合計4名である。宮崎大学教育学部附属小学校の教諭は、1名が中堅教諭、もう1名が若手の教諭である。宮崎大学教育学部附属幼稚園の教諭はどちらも中堅教諭で、年長児の担任である。なお、幼稚園教諭は2名とも宮崎県の人事交流の一環として着任している元小学校教諭である。

研修会は、先に示した研修プログラムの内容(表1参照)に沿って実施した。当初は、3つの場面を視聴し、話し合う予定であったが、当日の都合により、「砂のチョコレートづくり」(場面2)のビデオ視聴及び話し合いは、小学校教諭のみの視聴になり、話し合うことはできなかった。

また、研修の最初に幼小連携や子どもの見方・教育観に関する事前アンケートを実施し、研修直後に、研修の感想と子どもの見方・教育観の変化について事後インタビューを行った。

(2) 事前アンケートの項目と考察

事前アンケートの項目は以下の通りである。幼稚園教諭と小学校教諭に対し、幼小連携に関する意識や子どもの見方や教育観に関するアンケートを行なっている。ただし、所属に応じて内容が若干異なっている。なお、問1、問3、問6から問11の質問は、自分が当てはまると思うものを「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で行った。

[幼稚園教諭への事前アンケート項目]

- 問1 幼小連携は必要だと思いますか。
- 問2 問1のように答えた理由を書いてください。
- 問3 幼小連携は進んでいると思いますか。
- 問4 どのような連携を行なっていますか。(問3で1、2を選択した場合)
- 問5 幼小連携が進んでいないと答えた理由に当てはまるものを選択(○)して下さい。(問3で3、4を選択した場合)
- 問6 小学校教育について知っている。
- 問7 幼稚園は、小学校になるための準備教育をしたほうが良い。
- 問8 幼小連携は年長の担任がするイメージがある。
- 問9 小学1年生はできることがたくさんある。
- 問10 子どもができないことがあったらすぐに教える。
- 問11 子どもがけんかをしている場面を見つけたらすぐに指導する。

[小学校教諭への事前アンケート項目]

- 問1 幼小連携は必要だと思いますか。
- 問2 問1のように答えた理由を書いてください。
- 問3 幼小連携は進んでいると思いますか。
- 問4 どのような連携を行なっていますか。(問3で1、2を選択した場合)
- 問5 幼小連携が進んでいないと答えた理由に当てはまるものを選択(○)して下さい。(問3で3、4を選択した場合)
- 問6 幼児教育について知っている。
- 問7 小学校になるための準備を幼稚園でしてほしい。
- 問8 幼小連携は低学年の担任がするイメージがある。
- 問9 小学校1年生はできないことが多いので、1から丁寧に教えたほうが良い。
- 問10 子どもができないことがあったらすぐに教える。
- 問11 子どもがけんかをしている場面を見つけたらすぐに指導する。

幼稚園教諭と小学校教諭を対象とした事前アンケートから、幼小連携に対する意識や子どもの見方、教育観の共通点や相違点について、以下の点が挙げられる。

まず共通点として、幼稚園教諭も小学校教諭も幼小連携は必要だと感じていること、特に本附属学校園においては、幼小連携が「どちらかといえば進んでいる」と認識されていることの2点が挙げられる。しかし、先行研究でも示されたように、連携の内容が子どもの交流や引き継ぎ等になっており、教員の研修会を合同で行ったり、一貫した教育課程を編成したりするまでには至っていない。

一方、相違点として、以下の4点が挙げられる。

1点目に、両者とも幼小連携の必要性は感じているが、その理由が異なるということである。幼稚園教諭は子どもたちの成長にとって必要だからと考えているが、小学校教諭は「児童の実態把握のため」という言葉に表れているように、子どもを指導する自分自身のために必要だからと考えている。

2点目は、附属幼稚園の教諭は、人事交流で着任している元小学校教諭であるということも

あり、小学校の教育について把握しているが、附属小学校教諭は幼児教育についてあまり把握できていなかった点である。

3点目は、幼稚園では幼小連携は年長児担当だけで行うイメージはないが、小学校では低学年の担任が幼小連携を行うイメージが強いことである。そのようなイメージになる理由として、幼稚園では幼小連携を組織全体で行なっているが、小学校では1年生または2年生の担任だけが幼小連携を行なっていることが多いからであると考えられる。

4点目に、小学校1年生への見方の違いがある。幼稚園教諭は小学校1年生はできることがたくさんあると考えているが、小学校教諭は小学1年生はできないことが多く、1から丁寧に教えた方が良いと思っている。したがって、小学1年生は、幼稚園の時にできていたことも、小学校に入学すると、1から丁寧に教えられるのである。

このように、両者とも幼小連携が必要だと思っているが、その目的意識や子どもの見方、教育観は異なっていることが分かった。

(3) 研修プログラムの実際

1) 「屋内での車の工作」(場面1)を視聴した後の話し合い

「屋内での車の工作」(場面1)を視聴して行った話し合いの内容は、以下の3つのポイントに分けられる。

①協力・協働

子どもの協力や協働に関し、小学校教諭は、幼稚園児の姿のイメージの変容について次のように述べている。

一緒にやっている女の子と協力っていうか、協働っていうか、そういう姿が幼稚園生でこんなに見られるんだなと。(中略)「一個貸して」と言ったら「いいよ」というスムーズなやりとりが、なんか新鮮っていうか、思っていたような幼稚園児と違う姿だなと思いました。

つまり、小学校教諭は、自分がイメージしていたよりも、幼稚園児が協力や協働ができているということに気づいたのである。また、幼稚園児も上手に物の貸し借りができるということに気づいたと思われる。

②道具の使用に関する指導

幼稚園における道具の使用に関する指導について、小学校教諭から質問があり、それに幼稚園教諭が答えた場面があった。以下がそのやりとりである。

小学校教諭 C: ハサミとかを本当自由に使いこなしているなと思うんですけど、そういった時に、ハサミの指導とかはされるんですか。図工みたいな活動の中で、安全面とか。

幼稚園教諭 A: 刃物というかハサミについては、そこに置いてある、共同で使うのがハサミが唯一のものなんですけど、ハサミを使ったり、段ボールカッターを上にとちょっとしまっているんですけど、そういうものを使うときには、先生たちが近くにいるとってま

す。で、一斉に使い方を指導するわけでは無いんですけど、個別にですね、使う時にお話をするっていう形をとっています。あと、年長さんは集団活動というものがあるので、そのときには集団で一斉に教えることができるので、そこでは言いますが、でも、好きな遊びは個別の方が多いです。

幼稚園教諭 B: 明らかに使い方が危険だなとかいうときには、こうだよと伝えますけど。

幼稚園教諭 A: 自由に使えるのはね、この幼稚園は年中さんから。年少さんはもう先生が、使うときにここに置いているのではなくて、必要なときに出して、一緒に使ってしまうという形をとっているの。

このように、小学校教諭は、幼児がハサミを自由に使いこなしていることに驚いており、どのように指導を行なっているのか、疑問を持ったのだと思われる。本園では、ハサミや段ボールカッターの指導は、個別と集団での指導を組み合わせながら行なっている。また、安全面の配慮上、年中児以降のみがハサミや段ボールカッターを自由に使える。小学校教諭はこのような子どもの能力や実態を知る機会になったと思われる。

③子どもの工作のきっかけ

幼稚園教諭の感想の中で「何をきっかけにこれは作り始めたのかな」という発言が繰り返された。それについて、小学校教諭から質問があり、それに幼稚園教諭が答えた場面があった。以下がそのやりとりである。

小学校教諭 D: 先ほどから先生方がきっかけ、何かがきっかけでと言われてて、小学校のきっかけって導入ですよ？

小学校教諭 C: うん。

小学校教諭 D: 作る、その生活科か図画工作科が主にこういう制作だったりして、昼休みとかはなんか子どもたちもいろいろ持ってきてやってたりはするんですけど、小学校は、授業の導入で、例えば新聞紙で仲良くなろうで、新聞紙を出してみても、それをもとにこんなふうな思いを持ってぐしゃぐしゃにしてみたり、ウサギ作ってみたりとか、箱で家を作ったりとかするんですけど、そのきっかけ、どこから始まったのかなって、どういうことですか。

幼稚園教諭 A: あー。

幼稚園教諭 B: さっきのあの作りたいものがあったって、材料を集める、材料があったって、これ作ろうかな。

幼稚園教諭 A: 小学校にはない感覚です。これは。

小学校教諭 D: それって、日常的になってことですか？

幼稚園教諭 A: 日常的に、日常的に、はい。

幼稚園教諭 B: 子どもたちの会話のなかでも始まったりね。

幼稚園教諭 A: 後ろをご覧ください。材料が常に置いてあります。

幼稚園教諭 B: どこからでも自由に見えているところなら取っても良いので。

幼稚園教諭 A: 大きい段ボール先生くださいって、いつも知っていて、裏の倉庫に大きな段ボールがあるんですよ。ちょっと待ってねって、これくらいの大きさかなあって言って

見せたりとか、あえてそこにボンと置いて準備しておいて、その箱に興味を持ってもらったりとか、だから小学校にはない感覚です。昼休みとかに、自由に、材料持ってきて作り出すというのには感覚的には近いかもしれないです。

このように、幼稚園教諭は遊びの始まりである「子どものきっかけ」を気にしており、感想の中で繰り返し使っていたが、「子どものきっかけ」という感覚は小学校の教育にはないものであり、小学校教諭にとってはどのようなことかなかなか理解することができなかった。しかし、話し合いをする中で、小学校と幼稚園の「きっかけ」の感覚の違いに気づいていった。小学校では、導入で子どもが興味や関心を示すよう、教師が様々な工夫を凝らす。一方、幼稚園では、子どもが興味を持つ環境を構成し、遊びのきっかけを作る。この話し合いでは、小学校教諭と幼稚園教諭が考える学び（遊び）の導入の違いを知る機会になった。

2) 「けんかごっこからのトラブル」(場面3)を視聴した後の話し合い

「けんかごっこからのトラブル」(場面3)を視聴して行った話し合いの内容は、以下の3つのポイントに分けられる。

①幼稚園教諭のトラブルへの対応

この場面を視聴し、話し合う中で、小学校教諭は子どもたちが自分たちで解決する重要性や教師が待つことの大切さについて実感している。小学校教諭は感想で以下のように述べている。

小学校教諭 D: 子どもたちが喧嘩をして、それを自分たちでなんとか解決をして、っていうのがすごいなあと思いました。(中略) 大人が入ることで解決してしまうっていうこと自体が良くないなあと思って、今我慢をして見守るようにはしているんですけど、それでもやっぱり難しいなあということがある、っていうことを感じました。

小学校教諭 C: はい。あの、多分見られている先生方も2人とかの様子を見て、ここは行って止めるべきかとか話すべきかとか、多分待つっていうことを大事にされてるんじゃないかなと思いました。今も話があったように自分たちで解決をしていく力を気づかせるというか、そういったことをすごく大事にされているのかなというふうに思って。結構、小学校だと、怪我を起ささないために何ができるかというスタンスがすごく強いんじゃないかなと思います。喧嘩にしても、幼稚園の子どもたちの喧嘩と小学校の子どもたちがする喧嘩とでは、小学校でやってしまうと大怪我になることもあるので、そういったところも発達の差とかも体の大きさとかもあるのかなあというふうに、見て思いました。

小学校教諭は、幼児が自分たちでトラブルを解決できるということに驚いていた。それとともに、教師が見守る、待つことの大切さについても幼稚園教諭の対応から改めて学んでいた。また、小学校では子どもの発達に伴う力の増加もあり、怪我のリスクも高くなるため、怪我をさせないように何ができるかと考えるということが分かった。それに対し、幼稚園教諭は「怪我につながるトラブルというのは、もうできるだけ自分たちで解決するのが良いと思います」と述べ、「トラブルが起きないように」ではなく、トラブルが起きてもそれを自分たちで解決する機会だと捉えていることが分かった。

②トラブルの解決方法の指導

トラブルの解決方法の指導について、小学校教諭から質問があり、それに幼稚園教諭が答えた場面があった。以下がそのやりとりである。

小学校教諭 D: 園で仲直りのそういう表現の仕方を教えているのか、もう、もともとその子たちが持っている力なのかっていうのが伺いたいです。

幼稚園教諭 A: スキル学習っていうのはしてるんですけど、ご家庭にお願いするとかそういう事は無い。スキル学習もしながら、できるだけ自分の言葉で、自分で話すように促しています。(中略)だから、こう言わないといけないねとか、こう言いなさいとか、その、教師がこう言いなさいというような事はまずしない。自分で考えてさせて、今こうやって思っているんだって、じゃあどうすればいいかなと、まず考えさせることをずっと続けて去年はやっているの、自分たちの言葉がこう出てくるのかなあとと思いますね。

幼稚園教諭 B: 私たちに言いに来る子どももいるんですね。この子たちはこう自分で解決してるんですけど、やっぱり言いにくる子どもたちもいるから、それは、その子に言いに行こうかと言って、一緒に言いに行くことはあります。で、どう思ったの?、そう思ったんだね、じゃあそれ言ってごらんって、この子に言ってごらんって、こう思ったんだって、ていうのを促す。

幼稚園教諭 A: 繋いであげるっていうのをします。どうしてもわからないときには、こういう言葉で言うといいよとか一緒に言ってみようかとか、言うこともあるんですけど、まあその子に応じてですね。

幼稚園教諭の発言には、一度も「教える」という言葉は出ておらず、「促す」という言葉を繰り返し使っていた。ここから、幼稚園教諭は、スキル学習を行うこともあるが、日常的なトラブルの中でそれが解決できるように促すことで、子どもが解決方法を学べるようにしていることが分かる。その際に大切にしていることとして、自分で考えさせること、子ども同士を繋いであげることがあることが分かった。

③トラブルへの事後指導

これまで見てきたように、幼稚園教諭は子どもたち自身で解決できるように見守ることを大切にしているが、子どもたちだけで解決できた際の事後の指導について、小学校教諭から質問があり、それに幼稚園教諭が答えた場面があった。以下がそのやりとりである。

小学校教諭 C: この場合だったら、正座している子が多分押して、転ばせたと思うんですけど、この後にこの子に対して指導とかをされるんですかね。

幼稚園教諭 A: しますね。

幼稚園教諭 B: 振り返りはするかなと。どうなったらこうなったのって。

小学校教諭 C: タイミングとしては、(中略)子どもたちの話し合いが終わってから?

幼稚園教諭 B: そうですね、今日あんなことがあったよね、どうだった?みたいな。今度からどうする?どんなふう遊ぶか、次のステップに繋がるような声かけはしていく必要があるかなって気がしますね。

このように、幼稚園でもトラブルの後は事後指導をするが、幼稚園教諭は、指導するというよりは、子どもの気持ちを受け止め、次に繋げるような声かけを行なっているということが分かった。

(4) 事後インタビューの結果と考察

研修プログラム終了後、幼稚園教諭と小学校教諭それぞれに、研修プログラムの感想や子どもの見方・教育観の変容についてインタビューを行った。以下にその結果を記述する。

1) 幼稚園教諭への事後インタビュー

「幼稚園教諭と小学校教諭が教育観や子どもをみる視点について相互理解を図るような研修会は必要だと思いますか。」という質問に、幼稚園教諭は、「必要だ」と仰っていた。その理由として、「子どもの発達段階を知るきっかけになる」「子どもの学びは繋がっているから」と述べている。

「小学校教諭とのやりとりを含めた幼小連携に関するワークショップの経験は今までにございますか。」という質問では、新一年生が進学するときの引継ぎでは話をするが、普段の日常生活の中ではなかなか時間がないと述べられていた。附属幼稚園の教諭は、小学校教諭の時に経験されたことを主に答えており、幼小では、引き継ぎはするものの話し合いはなかなか行われていないという実態があることが分かった。加えて、「幼稚園の立場から言わせていただくと、一年担任だけじゃなくて、もっと上の学年の先生方にも幼児教育について知ってほしいし、幼児期にどうやって育ててきたかというのも知っていただきたい。」という小学校教諭に対する要望も述べられていた。上学年の担任が幼児期の子どもの育ちを把握できていないことで、幼稚園でできていたことでも高学年の児童に手伝わせ、小学校1年生にはさせないということに繋がる。研修会では、小学校低学年の担当者だけでなく、全ての学年の教員が、1年生になる子どもの育ちについて共有すべきだと考えられる。

「先生方が小学校教員に求めたいことはありますか。」という質問に対しては、幼稚園教諭は、「実態は知ってもらいたい。」「(子どもたちに)自分で考えさせて欲しい、その時間をあげて欲しい。」と仰っていた。

2) 小学校教諭への事後インタビュー

「幼稚園教諭と小学校教諭が教育観や子どもをみる視点について相互理解を図るような研修会は必要だと思いますか。」という質問に、小学校教諭も「必要だ」と仰っていた。その理由として、若手教諭は、今回の幼児の映像を見て、「学級経営もだけど、算数の授業でこれしよかなって、今図形なので、ひらめいたんですよ。」と述べ、小学校の指導にどのように活かせるかを考えるきっかけになったことが推察された。また、中堅教諭は、「小学校は迎え入れる側になるんですけど、どういう今まで経験してきたとか、もしかしたら課題とかもあるかもしれないし、良さもあると思うんですけど、それをできるだけ知った上で、1年生スタートするというのがすごくメリットがあると思う。」と述べられていた。

「研修会を通して学んだこと、考えたことはありますか。」という質問では、「子どもたちが自分たちでトラブルを解決する力をこうやってつけてるんだなあっていうことを知れたこと。」

「小学校の先生は1年生から子どもたちを見るイメージなんですよ。でも学びは連続してい

るから、幼稚園の頃にこういう学びをしていたとか、経験をしていたとかいうふうに、やっぱり繋がりで見るときっかけになった。」と述べている。小学校教諭は、今回の研修を通し、子どもたちが自分でトラブルを解決できるということやその解決力をつけさせる方法、子どもの学びを幼稚園からの繋がりで見るときの必要性について学んだことが分かる。

「これからどのようなことを小学校教育に活かしていきたいと思いますか。」という質問に、小学校教諭は、「結構私が入ったり、提示することが多かったんですけど、(中略)待つというか、ゆっくり時間を作るというかというの、ときには必要だなと思います。」「何か起きたときにすぐに何か言うのではなくて、ちょっと一回時間をおいて振り返らせ(中略)ていきたいと思いました。」と仰っている。小学校教諭は、子どもが解決する時間を確保するということや時間をおいて振り返らせるという研修を通しての学びを小学校での指導に活かそうそうとしていることが分かった。

「研修会を経験し、小学校の同僚に伝えたいことはありますか。」という質問に対し、小学校教諭は「小学校は幼稚園のことを知ろうとしないといけないし、幼稚園は小学校のことを知ろうとするというか、そういうふうにもっとしていかないといけない」ということを述べている。この研修を受けて、小学校にない教育観や相互理解の必要性を小学校教諭は伝え、広めていきたいと考えるようになったようであった。

(5) 研修プログラムの検証結果と考察

調査に協力してくださった小学校教諭と幼稚園教諭の両者とも、研修会后、これからも幼稚園教諭と小学校教諭が教育観や子どもをみる視点について相互理解を図るような今回のような研修会が必要だということを仰っていた。また、事前アンケートと事後インタビューを比較する中で、小学校教諭の子どもを見る視点や教育観、指導観が変容したことが明らかになった。具体的には、事前アンケートで「小学校1年生はできないことが多いので、1から丁寧に教えたほうが良い」という項目に、「どちらかといえばそう思う」と答えていた小学校教諭が、事後のインタビューでは「小学校の先生は、1年生から子どもたちを見るイメージなんですよ。でも学びは連続しているから、幼稚園の頃にこういう学びをしていたとか、経験をしていたとかいうふうに、やっぱり繋がりで見るときっかけになったなと思いました。」と回答している。このように、研修会前は、小学校1年生はできないことが多いと考えていた小学校教諭が、研修会参加後には、小学校に入学してからを見るのではなく、幼稚園での学びを繋がりで見るとほうが良いという考えに変化している。このことから、小学校1年生への見方が変容しているということが分かる。

また、事前アンケートで「子どもがけんかをしている場面を見つけたらすぐに指導する」という項目に、「どちらかといえばそう思う」と答えていた小学校教諭が、事後のインタビューでは、「何か起きたときにすぐに何か言うのではなくて、ちょっと一回時間をおいて振り返らせるっていうやり方が、やっぱり褒めるにしても叱る、注意するにしてもそういうやり方がすごくいいなと思って、すぐにぱつと言わないようにこれからしていきたいと思いました。」と回答している。このように、幼児のトラブルの場面やその際の幼稚園教諭の指導について話し合うことで、教師がトラブルにすぐに介入するのではなく、子ども同士で解決する時間を与えたほうが良いというように、教師の指導観が変容している。

その他にも、幼稚園の子どもも問題解決ができるということや、「子どもは素材から思いを

作る」のだという子どもをみる視点も変容していた。また、幼稚園教諭が一つ一つの小さな場面を大切にされているという教育観も理解することができていた。

以上のように、幼児期の子どもの様子を映像で見て話し合う本研修プログラムを通して、小学校教諭の教育観や子どもをみる視点、指導観が変容したと考えられる。

4. おわりに

本研究では、教師の子どもをみる視点や教育観の相互理解を深める研修プログラムを開発、実践し、その効果について検討することを目的とした。上述のように、開発した研修プログラムの調査に協力してくださった幼稚園教諭も小学校教諭も、今回のような研修会を行うことが今後も必要だと述べられていた。このことから、幼稚園教諭と小学校教諭が教育観や子どもをみる視点について相互理解を図るような研修プログラムの必要性が示された。また、研修会を通し、幼稚園教諭と小学校教諭が教育観や子どもをみる視点について相互理解を図ることができたとともに、小学校教諭の教育観や子どもをみる視点、指導観が変容するという効果も見られた。今後も、開発したプログラムを活用し、様々な地域で研修会を行うことが期待されるが、それにはいくつか課題がある。

一つ目は、効率性の問題である。今回作成した映像を活用し、他の学校園等で子どもを見る視点や教育観、指導観等を学ぶことは一定程度できるが、映像に映っている子どもが在籍していない園では、今回と同様の効果が得られないと思われる。在籍する子どもを対象とするためには、プログラム用のビデオを実施地域で作成することが望まれるが、小学校への引き継ぎを兼ねるのであれば、毎年映像資料を作成するのが最も良い。しかし、それは効率的ではないだろうし、研修を主催したり計画したりする側の負担にもつながる。

二つ目に、映像資料の作成の難しさである。今回のような映像資料を作成するには、幼小の子どもを見る視点や教育観の違いを把握していることが前提になる。したがって、幼児教育・学校教育両方の知識や経験を持つ人が作成することが望ましいが、そのような人材は地域に多くはないであろう。

三つ目に、個人情報の問題がある。今回の研究は、宮崎大学教育学部の附属学校園で行なったため、実施可能であったが、公立の学校で行う場合は個人情報の問題に注意して実施する必要がある。

以上のように、今回開発したプログラムは、汎用性という面で課題が残る。しかし、大学教員のような専門家や教育行政の協力を得たり、校務分掌に担当を位置づけたりするなどし、課題を解決することは可能だと考える。公立学校園での取り組みや実施についての検討は今後の課題としたい。

注

- 1) 幼小連携と幼小接続の言葉の違いについて、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(2010)では、「幼小接続の取組は、教職員の交流などの人的な連携から始まり、次第に両者が抱える教育上の課題を共有し、やがて幼児期から児童期への教育のつながりを確保する教育課程の編成・実施へと発展していく」と述べられている。つまり、「連携」という言葉は、「教職員の交流など人的な

関わりのことを示しており、「接続」は「幼児期から児童期への教育のつながりを確保する教育課程の編成・実施」に関わると考えられる。したがって本研究では、「幼小連携」を教職員の交流、研修会などを含む人的な関わりを示す用語として、「幼小接続」は、教育課程の編成・実施に関わることを示す用語として区別して使用する。また、幼小連携・幼小接続の「幼」は、幼稚園だけでなく、保育所や認定子ども園といった幼児期の教育を担う施設で行われる教育も含む（「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」）。したがって、本研究においても、幼小連携・幼小接続という場合の「幼」は、幼児教育・保育のことを指すこととする。

2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、以下の10項目として示されている。

「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」

3) 本論文は、令和3年度教職大学院における谷口夢歩による課題研究の一部を加筆・修正したものである（谷口夢歩「幼小連携における教師の相互理解を促すカリキュラム開発」『宮崎大学大学院教育学研究科教職大学院年報』第2号，2022年，125-128頁，所収，参照）。

4) 上述の課題研究において、幼小連携・接続に関わった経験のある大学教員、幼稚園園長、小学校教頭にインタビューを行っている。

参考論文

有嶋誠（2018）「幼稚園の『遊び』から小学校の『学び』への円滑な接続に関する一考察－小1プロブレムに関する保育者側の認識と保育現場の対策－」『宮崎学園短期大学紀要』第10号，1-14.

一前春子（2016）「保幼小連携研究の動向－取り組みの効果と移行期に育つ力の認識－」『共立女子短期大学文科紀要』第59巻，15-25.

河口麻希・七木田敦（2014）「保幼小連携に対する保育者と小学校教諭への意識調査－具体的な「伝えたい情報」と「知りたい情報」の比較から－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部第63号，81-90.

木村光男（2019）「幼小連携における諸問題と背景」『常葉大学教育学部紀要』第39号，249-258.

小松和佳（2020）「子どもの発達と学びの連続性を共通理解するために－保幼小合同研修プログラムについての一考察－」広島大学大学院人間社会科学研究科紀要『教育学研究』第1号，305-313.

濱田祥子・松井剛太・八島美菜子・山崎晃（2019）「幼保小接続カリキュラムの意義と課題－保育者と小学校教諭に対するインタビューから－」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第5巻，24-33.

廣瀬聡弥・山田芳明（2011）「幼稚園と小学校の教師が持つ保育・授業観とその形成－幼小接続のための相互理解に向けて－」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第56巻，23-33.

福元真由美（2014）「幼小接続カリキュラムの動向と課題－教育政策における2つのアプローチ－」『教育学研究』第81巻第4号，396-407.

幼児期の教育と小学校の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf (2022.10.24 最終アクセス)

謝辞

本研究における映像資料の作成に関し、撮影にご協力くださった宮崎大学教育学部附属幼稚園の先生方並びに園児の皆様、また、調査にご協力いただいた宮崎大学教育学部附属小学校並びに附属幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP20K02678 の助成を受けたものです。

(2022年10月24日受理)